

国際関係学部・研究科留学生に対する グループ・インタビュー調査に関する報告

水野かほる・稲田 晴年¹⁾
栗田 和典・島田 孝夫
坪本 篤朗・福永 有夏
余 項科

1 はじめに

本学部・研究科留学生の実態を把握する試みとしては、全国の私費外国人留学生の標準的な生活状況を調査したもの（財団法人日本国際教育協会 2002）、静岡県内高等教育機関に在学する留学生の生活と意識についての調査（静岡県留学生等交流推進協議会 1999）、静岡県立大学に在籍する留学生を対象に大学生活や学習状況、学生部に対する意見や下宿生活の状況、日本人学生との関係等を聞いたもの（静岡県立大学 1997）、同じく静岡県立大学留学生を対象として、日本語使用状況、留学生活における問題および社会的スキル調査を実施したもの（水野・田中・逢坂 1999）、また前記調査において積み残した結果および24時間録音調査結果の一部をまとめたもの（水野・田中・逢坂 1999）等がある。しかし、上記の大部分は質問紙形式のアンケート調査であり、留学生の実態がどれ程把握できているかという点からは、充分にとらえきれていない部分があると思われた。そこで、本学部・研究科所属留学生が本学における学生生活のなかでどのような困難に出逢い、その困難にどのように対処し感じ考えているのかに関してできるだけ具体的かつ率直に反映したデータを得ることにより、今後の留学生支援活動の参考とするため、グループ・インタビュー調査を実施した。なお、本調査は、本学部・研究科留学生アドバイザー全員が仕事を分担して実施したものである¹⁾。以下は、その調査の結果報告である。

1) 2002年度国際関係学部・研究科留学生アドバイザーのメンバーである。なお、2002年度の代表は水野がつとめた。

2 調査概要

2.1 調査方法

グループ・インタビューとは、「具体的な状況に即したある特定のトピックについて選ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論のこと」(S・ヴォーン/J・S・シューム/J・シナグブ(1999)7頁)である。グループ・インタビューが他の定性的な調査手続きと大きく違う点はグループ討議にあり、グループ討議により、ある特定の話題に対して率直で日常的な会話を作り出すことが可能であるとされる(前掲書,7-8頁)。従って、従来のアンケート調査と比べて、より現実の留学生の実際を映し出すことを可能にする試みであると考えられるが、ここで求めるものは意見の量ではなく質的な多様性であるため、ある発言をした者の人数を数えることを考察の対象とはしていない。

本グループ・インタビューは2002年7月9日～19日に計8回、留学生8グループ(1グループ3～6名)に対して実施した。実施時間は1グループ当たり1時間30分～2時間であった。今回の調査の目的は、留学生が本学入学後どのような困難な状況に出逢い、それに対してどのように対処したかを知ることである。各グループ・インタビューにおいては留学生アドバイザーが司会者と書記として参加し、書記がメモをとると同時にテープ録音をおこない、インタビュー実施後、記録データを文字化後に単位化し、その単位をカテゴリー化する手順で分析をおこなった。

2.2 被調査者のプロフィール

調査に協力してくれた留学生は37名である²⁾。被調査者のプロフィールは以下の通りである(()内は%)。

各留学生の所属は、学部生24名(64.9)、大学院生5名(13.5)、研究生8名(21.6、学部研究生1名、大学院研究生7名)。学年内訳については表1参照。男性10名(27.0)、女性27名(73.0)。出身国・地域は表2を、また年齢は表3を参照していただきたい。静岡県立大学における在籍期間は、1年未満が11名(29.7)、3年以上4年未満が10名(27.0)(表4参照)。来日してからの期間は、最も短い学生が5か月、最

2) 調査時点での国際関係学部・研究科所属留学生(研究生および休学生を含む)は59名である。

も長い学生で8年3か月であった(表5参照)。

〔表1. 学年〕(標本数37) 単位: 度数 (%)

学部	25 (67.6)	大学院	12 (32.4)
(学部内訳)	1年 1	国際言語文化学科	1年 3
国際関係学科	2年 5		2年 1
	3年 5		3年 1
	4年 6		4年 2
研究生	1		
(大学院内訳)			
国際関係学専攻	1年 1	比較文化専攻	1年 0
	2年 0		2年 4
研究生	7		

〔表2. 出身国・地域〕(標本数37) 単位: 度数 (%)

インドネシア	4 (10.8)	カザフスタン	1 (2.7)
韓国	7 (18.9)	スリランカ	2 (5.4)
台湾	2 (5.4)	中国	17 (45.9)
ネパール	1 (2.7)	ベトナム	1 (2.7)
モンゴル	1 (2.7)	ロシア	1 (2.7)

〔表3. 年齢〕(標本数37) 単位: 度数 (%)

21~25歳	16 (43.2)	26~30歳	15 (40.5)
31~35歳	5 (13.5)	36~40歳	1 (2.7)

〔表4. 静岡県立大学における在籍期間〕(標本数37) 単位: 度数 (%)

1年未満	11 (29.7)	1年~	7 (18.9)
2年~	7 (18.9)	3年~	10 (27.0)
4年~	1 (2.7)	5年~	0 (0.0)
6年~	1 (2.7)		

〔表5. 来日してからの期間〕(標本数37) 単位: 度数 (%)

1年未満	3 (8.1)	1年~	3 (8.1)
2年~	10 (27.0)	3年~	8 (21.6)
4年~	7 (18.9)	5年~	5 (13.5)
6年~	0 (0.0)	7年~	0 (0.0)
8年~	1 (2.7)		

3 調査結果の概要

以下において、調査結果をカテゴリー別に情報単位化した結果を記述する。また、各カテゴリー別に得られた情報単位をより深く理解してもらうために、一部に留学生

自身の表現にもとづいた詳細な情報を提示する（*部分）。

1 学習環境

1) 全般

どの授業を履修したらよいかかわからない（特に1年生のとき）。

どうやってゼミを決めればいいのかかわからない。

学業への不安（卒業・修了できるか、論文を書けるかなど）。

授業でわからないときは、留学生や先生に聞いたり、自分で調べる。

勉強に興味もてる・たくさん勉強したい。

某教員の教室での言動が不愉快。

授業のなかで、出身国の代表のように扱われる。

*「中国はどうですか？」いきなり中国の代表になってしまう。私は中国人だけど、江沢民さんでもないから、全部知ってる訳でもないし、私の発言が正しいかどうか心配するし、そういうのが嫌。

*何か国家的に先生から固定化されて判断されるのはあまり好きじゃない。

2) 日本語

卒論を書くのが大変そう。

専門用語・ポイントを板書して欲しい（特に、漢字圏から来た留学生の要望）。

先生の声が小さい・発音が不明瞭・早口。

カタカナ語・専門用語が難しい。国の名前、呼び方が異なる。

先生の表現が曖昧・言いたいことがわからない。

言葉よりも論旨が理解できない。ノートのとり方がわからない。

「日本語Ⅰ・Ⅱ」（1年）のテキストのレベルが少し低い。

「日本語Ⅲ・Ⅳ」（2年）は論文の書き方等で役に立つ。

日本語でレポートを書くのが大変（本を読んで感想を書く課題のときは早く教えて欲しい）。

3) 英語

日本人の学生に合わせた授業にはついていけない。留学生向けの英語の補習も難しい。大学院試験の際にハードルになる。

「オーラルコミュニケーション」にはレベルをあげて欲しい授業もある。

「総合英語」はよかった。

英文和訳は大変である。

4) 施設

図書館：利用時間を延ばして欲しい／土日の開館を望む／レポートに指定する本をたくさん入れて欲しい。

国際のコンピュータ室は台数が少なく、狭く、冷房がない／プリンターが1台しかない。

5) 研究生

正規生にはあっても研究生にはない権利（学割等）はなにか？

研究生受付時に、研究生の権利に関する詳しい説明が欲しい。

留学生アドバイザーに相談するにも遠慮してしまう。

研究生の申し込みは随時できるが、4月以外の月だと不便なことが多い。

2 人間関係

1) 人間関係一般

（アジア系）外国人に対する差別・偏見がある。

なにかトラブルがあると留学生がやったと思われる。

中国人に対するマイナスのイメージが強い（密入国など）。

中国人に対して固定的なイメージをもっている先生もいる。

留学生という理由でアルバイトに採用されなかった。

警察に職務質問をされた。

病院で診察を後回しにされた（「外国人ですが、あとにしますか」という声が聞こえた）。

就職活動時に留学生への差別がある（企業見学を断られた例）。

ストーカーの被害にあった。

みんな親切。

寂しいと感じるときがある。来日後、友だちが少なくなった。

何年いても外国人として扱われる

自国の人にはジョークが大好きなので、失礼なことを言ってしまうことがある。

*一番嫌なことは、自分が日本人に何かしてもらいたくなくても、「××は貧乏な国」「東南アジアは貧乏だね」という同情から押しつけられることがある。

*日本に来て長くないときは、日本人が表で優しいのしかわからない。でもだんだん裏で、外国人貧乏と言っているのがわかってくる。…でもほかの日本人もいる。いい日本人とそうじゃない人が区別できるようになった。

* 貧乏だから、食べ物や着る物がないから日本に来たのではない。勉強しに来たのだ。
変な同情をする人が結構多い。

2) 学内での関係

日本人の友人は多い。

日本人の友人はいる。

日本人学生の友人が少ない。

親友はなかなかできない。

日本人学生と友達になりたい。

でも、日本人とのつき合いにはお金と時間がかかる（飲みに行ったりなど）。

でも、アルバイトがあつて、友達を作る時間がない。

日本人学生には近づきにくい。

日本人学生から近づいてくることはない。

集団内では優しそうでも、個人になると態度が変わる。

日本人が集団でいると、近づきたい感じがする（多数派の意見）。

挨拶や表面的な会話だけ。

あるときは親しくしても、翌日には冷たい。

日本人学生との年齢差が問題。

留学生と日本人学生との交流の機会が欲しい。

国際学友会について

- ・以前の学友会と今の学友会とは違う。行っても日本人とは友だちになりにくい。

- ・自分は学友会で楽しくやっている。

* なかには、本当に親切で、悩みを聞いてくれる人、困ったときに助けてくれる人もいるけれど、大部分は挨拶だけでおわる。

* 交流したいが、行っても日本人同士、留学生同士で固まっていて、実際には交流できないので、面白くない。

* 見えない壁が存在しているような感じがする。日本人学生のなかには、自分はいれないという気がする。

* 日本人の学生は、何かをしてもらおうという感じが強く存在している。自分の方から努力しない。

3) 学外での関係

大学外に日本人の友人がいる。

国際関係学部・研究科留学生に対するグループ・インタビュー調査に関する報告

<例>アルバイト先の学生・フリーター（一緒にいる時間が長い）

近所の人（特に年齢の近い人）

アルバイト先の人の方が優しい

大学に入る前からの友人

*アルバイト先。そういうところの人のほうが優しい。学生でなく、お年寄りの人が優しくて、わかってくれる。

3 健康面

特に大きな病気や怪我はしたことがない。

<病気等の例>角膜炎・親不知・虫歯・風邪・皮膚病・鼻炎・消化不良・できもの・怪我・下痢・生理不順・環境の変化による身体の変化

突然の喘息で通院している学生1人。原因は環境変化、ストレス。

他にストレスで生理不順が1名。けがで通院経験あり1名。

インタビューの後、事故（車×車）にあった学生あり（打撲で通院中。全治1ヶ月）。

一人暮らしで病気になるのが不安。

医者の説明に専門用語が多くて難しい。

意識をうしなって救急車で病院に運ばれた。

かかった医者がひどかった。

病院がどこにあるかわからない。

4 生活面

1) 住居

寮（大学または県の施設として）があればいい（金銭的な理由及び友人を作るため）。

留学生がアパートを借りるのは難しい（不動産屋で断られる、保証人が必要など）。

家賃が高い（留学生全体に、収入に占める家賃の割合が高い）。

保証人、書類、保証人の実印が必要なので困った。

隣人の騒音に悩まされている。

2) 日本の習慣にとまどった

畳・和室が多く、洋式の部屋を借りたいが、家賃が高くなる。

日本社会はどこでもハンコがないとダメ。

5 ことば・コミュニケーション

非漢字圏の留学生には漢字の習得が大変。

日本人が言っていることの本当の意味、表現の裏にある感情（本音）や思考方式がよくわからない。

バイト先の上司の言葉が曖昧。

日本語学校で覚えた日本語と日本人学生の使う日本語は違う。

丁寧語の使い方が難しい。年下の人で、最初は丁寧語でもすぐにタメ口ぐちになったりする。

微妙なニュアンスがわからない。東京と関西の違いがわからない。

日本人ははっきりものを言わない。

「あなたの日本語おかしいよ」と言われると嬉しい。

6 経済面

物価が高い。アルバイトをしないと生活できない。

アルバイトのため勉強する時間が足りない。

アルバイトと勉強の両立が難しい。

アルバイトを見つけにくい（外国人だから採用されない）。

奨学金がもっと欲しい（採用人数、貸与額・給与額とも）。

授業料の減免はとても助かるが、半年ごとの手続きが煩雑。

奨学金・授業料減免について、詳しく説明して欲しい。

教材費の支給額・支給日の問題（新年度が始まる時に必要）。

7 これまでで最も困ったこと

大学院に入りたいが試験が不安。

図書館で財布（カード、外国人登録証などの入った）を紛失した。

入学時のガイダンスがわかりにくかった。

英語。

お金の問題。勉強とバイトの両立。

8 困ったとき誰に相談するか

国際関係学部・研究科留学生に対するグループ・インタビュー調査に関する報告

留学生の先輩・友人、日本人の先輩、保証人、親、アルバイト先の日本人、日本語学校の先生、指導教員、大家、その問題に直接関係ある人、学生係

日本人学生には相談してもはっきりした意見が聞けない。

結局は自分でやるしかない。

留学生担当教員がいたらいい。

- ・ビザ取得・入国管理局などの法的な手続き、受験や大学案内、下宿、保険を手伝って欲しい

- ・先生には仲がよくても言いづらい

留学生アドバイザーは相談相手として思いつかない。

9 留学生パートナー³⁾ (または一般学生) への要望

勉強を手伝って欲しい。

レポートの日本語を直して欲しい。

授業中のノートのとり方を教えて欲しい。

参考資料の探し方を教えて欲しい。

友達になってくれること。

病気のとときに、電話の一本でも欲しい。

最初はパートナーがいて助かった (先生の情報を得るなど)。

留学経験者をパートナーにすべきだ (留学経験のない日本人学生には、留学生の辛さがわからない)。

もっと国際意識をもって欲しい。

パートナーがあまり相談にのってくれず、助けにならない (つき合いのあるのは最初の1ヶ月だけ)。

いろいろなことを話し合える日本人の友だちが欲しい。

10 その他

後輩にいろいろな事を教えたい。

学食がまずい。

豚肉が食べられないので、食堂で困る。

3) 本学では、平成14 (2002) 年度からパートナーシップ制度が実施されている。本制度は、パートナーを希望する日本人学生が入学したばかりの留学生をサポートするものであり、これによって留学生と日本人学生の交流のきっかけを提供する取り組みである。

日本人学生のマナーが悪い（食後に女性の前でベルトをゆるめる等）。
太陽堂県大店で「図書カード」を使えるようにして欲しい（教科書購入）。
通訳などの知的なアルバイトの紹介を大学でして欲しい。
良い病院に関する情報をまとめたリストが欲しい。
中国語講座を主催すれば留学生が働ける。
留学生用の就職相談、就職情報提供をして欲しい。
国際交流談話室のパソコンを増やして欲しい。
引っ越し前の荷物、留学生同士の物の交換、次に来る学生に物を譲るなど。ホームページなどへの公開。
偉い人や先生の体験談を聞き、励まされたい。

4 おわりに

今回の調査に参加した留学生に留学生アドバイザーのことを知っているかとたずねたところ、83.8%の学生は「知っていた」と答えたが、16.2%は「知らなかった」と答えた。83.8%という数字を多いと見るか少ないと見るかはさておき、本学部・研究科留学生アドバイザーは、昨年度と今年度に就職委員会と共催で留学生と日本人学生を対象とする就職支援活動（就職の決まった4年生が後輩学生に就職活動についての話をする）を実施しており、さらに今年度は本調査を実施した。これらの活動をつうじて、少しずつではあるがわれわれ留学生アドバイザーの存在も留学生のあいだに知られるようになってきたのではないかと自負している。本調査結果は全学留学生委員会に報告され、本結果を受けて、外国語での受診が可能な病院リストを事務局に常置する、研究生の権利・教材費の支給・機関保証人制度等の情報を積極的に提供する、などの対応をはかっていただけたことは喜ばしいことである。また、本学部・研究科においても、調査結果を留学生にフィードバックすると同時に、今後学部・研究科でできる対応をして行きたいと考えている。

今回の調査をおえた後、調査に携わったある留学生アドバイザーの教員から「留学生が、『初めて言いたいことを言える機会をもてた。こういうことを毎年やって欲しい。』と言っていたのが印象的でした。」とのコメントが寄せられた。グループ・インタビューは、その準備・実施・データ分析において多大の時間と労力が必要とされる。しかしながら、そこから得られる情報や成果も大きいと考えられるため、毎年の実施は難しいが、今後も数年に一度、あるいは被調査人数を限って実施していきたいと考

えている。

最後に、忙しいなか、多くの留学生の皆さんが本グループ・インタビューに協力してくださったことに感謝したい。また、グループ・インタビュー実施にあたって、ご指導・ご助言をいただいたのみならず、司会者としてもご協力をいただいた渡辺聡先生、津富宏先生に感謝を申し上げる。

参考文献

- S・ヴォーン/J・S・シューム/J・シナグブ著、井下理監訳、田部井潤・柴原宣幸訳
(1999)『グループ・インタビューの技法』慶應義塾大学出版会
- 後藤秀夫(1996)『市場調査マニュアル(改訂新版)』日本マーケティング教育センター
財団法人日本国際教育協会(2002)『平成13年度私費外国人留学生生活実態調査』
静岡県立大学(1997)『留学生生活・学習状況調査報告書』
静岡県留学生等交流推進協議会(1999)『留学生実態調査報告書』
- 水野かほる・田中ゆかり・逢坂里恵(1999)「静岡県立大学をとりまく状況調査
ーアンケート調査報告ー」静岡県立大学国際関係学部『国際関係学双書16 こと
ば・文化・社会』179-202頁
- 水野かほる・田中ゆかり・逢坂里恵(2000)「社会的スキルと留学生生活」『静岡県立
大学 国際関係学部研究紀要』第12号、117-128頁